

## 用の美

この秋、雑誌「サライ」に木漆工芸家・黒田辰秋の作品群が載っているのを見て、興味を覚えた。これまで漆芸家といえば、松田邦夫先生のご尊父・松田権六氏しか知らなかった。権六氏が、甲乙付け難い二作品の審査を依頼されたとき、「軽いほうが良いに決まっている」と言下に答えたとという話を聞き、その美意識に感銘したことがある。

今回、辰秋作品をネットで検索すると、以前角館で買った霜降り皮の茶筒とそっくりな映像を見つけた。角館の茶筒は山桜の樹皮の風合いが良く出ていて、今でも好んで使い続けている。

オークションでの提示価格は、京都一泊旅行を一回する程度の値段だったので、申し込むとその値で手に入れることができた。届いたものは、角館の茶筒を一回り小さくしたようなもので、これは茶筒ではなくナツメであった。箱書きの署名「辰秋造」は本物であろう。触れた感触もとても良い。

昨年（令和6年）12月17日から本年3月2日まで、京都国立近代美術館で「生誕120年 人間国宝黒田辰秋・木と漆と螺鈿の旅」が開催されているので、早速京都に飛んだ。

辰秋の名は、120年前の辰年の秋に生まれたので付けられ

たという。彼は京都の塗師の家に生まれ、幼いときから漆に親しんで来た。ただ15歳のころから、図案制作、木工による素地作りから塗り、加飾に至るまで自身で行う一貫制作を志した。さらに工芸を芸術にまで昇華した陶芸家の富本憲吉に感化されたり、河井寛次郎が柳宗悦らと進めていた民芸運動にも関わるようになる。彼らが説く美用品の「用の美」に共鳴したのである。

展覧会では、棚、三面鏡、椅子から状差し、茶道具に至るまで数多くの作品が展示しており、その仕事量に圧倒された。さすがに直接触れることはできなかったが、生活しながらそれらの作品を側に置いたり、使いこなせたらさぞや豊かな気分になるだろうと思うものばかりである。黒沢明は辰秋の椅子とテーブルセットを、浜美枝は三面鏡を買い求めている。辰秋と縁の深い「くずきり」の店「鎌善良房」にも立ち寄ったが、両壁面に彼が作った巨大な棚が置かれており、現役で働いている。また京大北門前の「進々堂」という喫茶店には、今でも彼の制作した大きなテーブルと長椅子が使われている。京大生にも親しまれて来たのであろう、テーブルの両サイドの漆はずでに剥げ落ちていた。用をなせば剥げるのは当たり前である。それが文化というものであろう。

ところでこの秋の埼玉漢方特別講座は、樫原市の田中秀一

先生のご尽力のもと、三谷和男先生もお迎えして奈良で開催された。ここでわたしは大仰にも「美意識と医療」と題して講演させてもらった。「真善美」を踏まえたくえで美について考察しながら、医療における美とは何かを追求してみた。美容整形とか外科医の卓抜な手術もあるが、内科系では、できるだけ薬を使わない自然治癒力を生かした治療に美しさを感じていたので、これについて講演したのである。また、不自然なことをおかしいと思う心も美意識である。

黒田辰秋も木工芸で最も重視したのは自然であり、木の性格を生かす工夫をしていた。彼は木工について「最も美しい線は、削り進んでゆく間に一度しか訪れない。削り足りなくても駄目、削り過ぎて駄目」とか「その木の性格を、そのまま生かそうと、自然にやつて来ただけ」と語っている。

医療も同じで、患者の性格や体質、環境をよく観察して、手を加え過ぎるでもなく、さりとて何もしないのでもなく、ちょうど良い塩梅のところは意外に限られているのではなかろうか。そこが医療における「用の美」とも言える。